

Carnaval do Rio de Janeiro vs COVID-19



例年であれば、今ごろはカーニバルが終わり、脱力モードのブラジルのリオデジャネイロ。世界最大規模の祭典「リオのカーニバル」が今年は新型コロナの影響で、100年以上にわたるカーニバル史上初めての中止に追い込まれた。軍事政権下でも、ハイパーインフレ時でも毎年欠かさず開催されてきたカーニバルも新型コロナには勝てなかった。世界で3番目の累計感染者数を記録するブラジルで、「濃密」が売りのカーニバルだけにやむを得ない。なお、40年の歴史を誇る「浅草サンバカーニバル」は昨年に続き今年も中止が決定された。



Bateriaで
パレード中の筆者

新型コロナのパンデミック直前に開催された昨年は、リオ市に約210万人の観光客を呼び込んだ（ちなみに、筆者がリオ赴任中にBateria（打楽器部隊）の一員として参加していたサンバ学校「Viradouro」が1部

リーグ優勝に輝いた！）。観光収入は1500億円を超え、2014年にブラジルで開催されたサッカーW杯に匹敵する水準を記録した。サンバ学校はリオだけでも約70校を数え、1校当たり2000～4000人もの老若男女が集う。いわゆる「インフォーマル経済」を支える貧困層が中心メンバーで、カーニバルの衣装代などに費やすお金を1年間かけて懸命に稼ぐ。カーニバルは、こうしたメンバーが年に1度だけ「主役」になれる場だ。カーニバルの中止が観光収入以外にもブラジル人のメンタルや基礎経済に与える影響は計り知れない。

リオのカーニバルは、1年かけて計画的に準備が行われる。各サンバ学校は、まず、ブラジルの政治、経済、文化などから旬なテーマを選定し、テーマに基づき20前後の候補曲を作成、9月から11月にかけて絞り込みテーマ曲を決定する。その後、年末から本番にかけてテーマ曲に沿った山車や衣装の作成、振り付けの練習など準備はピークを迎える。今年のテーマ曲では、Acreditar（確信する）やSuperação（克服）といった単語が例年になく目立った。各サンバ学校はSNSを通じて仲間同士励まし合いながら準備を重ねてきただけに、意気消沈しているだろう。

でも、そこは根っから陽気で楽天的なブラジル人。筆者のリオのサンバ仲間も「悲しみの後には2倍の喜びが待っている」と笑ってみせた。来年のカーニバルはワクチン接種がいきなり、まさに「倍返しだ！」の勢いでブラジルを、そして世界を明るく盛り上げてくれることを心から願ってやまない。

(JOI調査員 細島) 🇧🇷



1部リーグ2020年優勝のViradouroのパレード（写真：RioTur）